

ザイン・アッディーン・マアバリ－・マリ－バーリー著
『ポルトガル人の状況に関するジハード
戦士の贈り物』 訳注（４）

谷 口 淳 一

[28 (186)]

第 3 章 マラバルの不信仰者たちの奇妙な慣習に関する小論

以下のことを知るように。マラバルの不信仰者たちの間には、他の諸地域（aqtār）では見られない奇妙な慣習がある。

彼らの支配者（rāī）が戦いで殺害された場合¹⁾、彼の諸軍団（‘asākīr）は、敵勢を全員殺害するか敵の王国をすべて荒廃させるまで、彼の敵やその軍団、国（bilād）を攻撃する。したがって、彼らは支配者の殺害を非常に恐れている²⁾。これは彼らの古い慣習である。ただし、近年ではそれが守られることは少ない。

マラバルの支配者たちは、ザモリンを支持する一派とコーチン（Kaṣī）の支配者を支持する一派の 2 派に分かれている。この状態は、偶発的な事件による場合を除けば変化し³⁾ ない。[そのような場合でも、その原因となった] 偶発的な事件が解決すると、彼らは元の方針に戻る。

彼らは戦いにおいて奇襲することはなく、戦いの日を決めておき、それを違えることはない。彼らは戦いにおける奇襲を卑劣なことと考えている。

* 本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第 3 章～第 4 章第 1 節 [Tuhfa/L: 28–44] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物（1）」および「谷口2012」を参照されたい。

1) 殺害された場合（iqā qutīla）：Tuhfa/L では in uqtila と読めるが、諸写本 [A: f. 5 b ; B: f. 124 b ; C: p. 27 ; D: f. 7 a] に従って読む。

2) ナーヤルの戦士たちが君主の復讐を執拗に追求することについては、バルボザも記録している [バルボザ：528–529 頁]。

3) 変化し（yaḥṭalifu）：Tuhfa/L では yaḥlufu（後に続く）と読めるが、諸写本 [A: f. 6 a ; B: f. 124 b ; C: p. 27 ; D: f. 7 a] に従って読む。

バラモン (barāhima, sg. barahman)、大工および彼らに類する者たちに関しては、母、父、兄などの年長者が死んだ場合に、またナーヤル (nayyār) や彼らと類似の者たちに関しては、母、母方のおじ、姉などが死んだ場合、彼らは丸1年の間、女性との性交、動物を食べることを、キンマの葉 (tanbūl) [を噛むこと]、髪を切ること、爪を切ることを忌避する。彼らはこれら慣習を [29 (185)] 死者のための追善 (qurba) と考え、それを違えることはない。

ナーヤルや彼らと類似の集団 (ṭawā'if) における相続権 (irt) は、財産も王権も⁴⁾、同腹の兄弟、姉妹の子、母方のおば、または母方の親戚にあり、[父の] 子にはない。この習慣、すなわち [父の] 子への相続⁵⁾ の欠如は、カナノール⁶⁾ とその周辺のムスリムの大半に広まっている。彼らの中には、クルアーンを読誦する者、暗誦する者、見事に朗誦する者、宗教上の知識 (ilm) を学ぶ者、宗教儀礼 (ibāda) に勤しむ者がいる。それにもかかわらず、彼らは [相続については] ナーヤルたちに従っている。

バラモン、金細工師、大工、鉄工、ファーザーン⁷⁾、漁師などについては、彼らの相続権は、[父の] 子にあり、彼らには結婚 [制度] がある。一方、ナーヤルについては、彼らの結婚とは、最初に女の首に紐 (ターリ) を掛けるだけのことである。すると結婚した状態 (ḥāl 'āqid) となるが、そのこと以外には [実際の生活において] 何も変わらない。

バラモンは、複数の兄弟がいる場合、長男に子ができないことが判明

4) 財産も王権も (māl^{an} wa mulk^{an}) : あるいは、「動産も不動産も」(māl^{an} wa milk^{an}) か。

5) 相続 (tawrīt) : *Tuḥfa/L* では tawārīt となっているが、A 写本 [f. 6 b]、*Tuḥfa/Q* [19]、*Tuḥfa/T* [237] に従って読む。B、C、D 写本はいずれも tawārīt とするが、この綴りは辞書には見られないようである。tawrīt の複数形か。

6) Kannanūr (Kannur/Cannanore). Kannur 県の中心都市。Cf. Logan 1887, v. 1: 70.

7) ファーザーン (al-fāzānīyūn) : サブカーストの名称と思われるが、不詳。Lopes は、Logan 1887 に依拠して、この語をマラバルで Tiyan と共に最大人口を擁するサブカーストのシャナーンに比定し、*Tuḥfa/L* では al-sānānīyūn としている。Saīd もこのように綴るが [*Tuḥfa/T*: 237]、写本はすべて al-fāzānīyūn となっており、Qādirī 版は諸写本と同様に記されている [*Tuḥfa/Q*: 19]。ただし、写本 B [f. 125a] と *Tuḥfa/Q* では、冠詞の次の文字が f ではなく g に見える。Nainar は、shārnār と転写し、ココヤシの樹液を採集する人々と説明している [*Tuḥfa/trans/N I*: 44, n. 3]。ファーザーンが椰子の樹液を集めることについては、本書にも記述がある [本訳: 30-31頁]。

しない限り、長男だけが結婚し、その他の者は結婚しない。相続者が増えて対立が生じることのないようにするためである。そして、長男以外は、ナーヤルのように、結婚しないままナーヤルの女性たちと通じるのである。[30 (184)] ナーヤルの女性たちと彼らとの間に子ができても、その子を相続人とはしない。長男に子ができないことが判明した場合は、長男以外の者が結婚する。

ナーヤルや彼らと類似の集団の女の許には、2人、4人またはそれ以上の男が集まり⁸⁾、彼らが各々一晩ごと順番に〔ナーヤルの女性を〕訪ねる。ムスリムの夫が複数の妻たちの中で〔訪ねることを〕分けるようなものである。この点について、彼らの間で敵意や憎しみが生じることはいくつか少ない。大工、鉄工、金細工師や彼らと同類の者たちもナーヤルに倣い、複数の者が一人の女性の許に集まる⁹⁾。ただし、彼らは兄弟か、さもなくば親戚どうしである。相続人が分散してしまわないためであり、相続について彼らの間での対立を少なくするためである¹⁰⁾。

彼らは身体を露出する人々で、両恥部 (saw'atāni) とそのまわり以外は隠さない。身体その他の部位は露出している。この点については、男も女も、王も有力者も同じである。女性は誰からも隠れることはない。ただし、バラモンの女性だけは別で、彼女たちは人目を避ける。一方、ナーヤルは、女たちを高価な宝石や衣服で飾り立て、男たちが彼女たちを見て楽しむために、大きな集会に彼女たちを出席させる。

彼らの間では、一瞬の差であっても最年長の者だけが王になる。その者が、[31 (183)] 愚か者であれ、盲目であれ、虚弱者であれ、あるいは母方のおばたちの子供であったとしても。兄弟たちや母方のおばたちの子供の一人が、早く王位を手に入れるために自分より年長の者を殺したという話は聞かない。

彼らは、相続人が絶えるか少なくなった場合、外部の者——年をとっ

8) 集まる (yaḡtami'u) : *Tuhfa/L* では yuḡammi'u (集める) となっているが、写本 [A: f. 7 a ; B: f. 125b ; C: p. 29 ; D: f. 7 b] に従って読む。ただし、D 写本のこの部分は判読しづらい。

9) 集まる (yaḡtami'u) : *Tuhfa/L* では yuḡammi'u (集める) となっているが、写本 [A: f. 7 a ; B: f. 125b ; C: p. 29 ; D: f. 8 a] に従って読む。

10) マラバル (ケーララ) におけるバラモンおよびナーヤルの婚姻慣習については、バルボザ (1521年没) も言及している [バルボザ: 504–505頁]。栗屋利江の研究も参照せよ [栗屋1989: 101–104頁; 栗屋1994: 322–326頁]。

ていてもよい——を養子に取り、子、兄弟あるいは母方のおばの子とし、相続人とする。そして彼らは、相続権と王権に関して、養子と実子 (aṣlī) との間に差をつけない。この慣習は、マラバルの不信仰者たち全員、すなわち王たちと上下層の臣民たちの間で行われており、そのおかげで彼らの相続人は絶えることがない。

彼らは多くの宗教的義務 (taklifāt) に固執しており、それらを放棄しない。というのも、彼らは、上位と下位および両者の間と、実に多くの階層 (aḡnās) に分かれているからである。上位と下位の者が接触するか、底辺の人々 (danīyūn) に関して彼らの間で周知の限度まで近づいてしまうと、上位の者は身を浄めなくてはならず、浄める前に食物を食べることは許されない。万一浄めの前に食物を食べてしまった場合は、その者は自分の位階から落とされる。そういう人物は、上位の位階には受け入れられず救済策は無いので、その民が誰も自分について知らないような場所へ逃げるしかない。さもなくば、その人物が子供か女性である場合、その地の支配者が捕らえ、より下の位階の者に売ってしまう。あるいは、我々の所へやって来てムスリムになるか、[32 (182)] ヨーガ行者 (ḡūkī) になるか、キリスト教徒 (naṣṣrānī) になるかである。同様に、下位の者が調理した食物を上位の者が食べることは許されない。万一食べてしまった場合は、自分の位階から追放される¹¹⁾。

紐の主たち (aṣḥāb al-ḥuyūt)。彼らは、首¹²⁾ に紐を帯びることに固執している者たちで、マラバルの不信仰者たちすべての中でもっとも上位にある。そして、彼らもまた上位と下位および両者の間というように複数の集団 (ṭawā'if) に分かれている。バラモンは、紐の主の最上位であるが、彼らもまた複数の種類 (aṣṇāf) に分かれている。紐の主たちの下は、ナーヤルである。彼らはマラバルの民の軍団であり、人数と力の点ではマラバルの民の中で最大〔勢力〕である。彼らもまた上位と下位および両者の間というように多くの種類に分かれている。彼らの下は、ファーズーンである。彼らは、ヤシ¹³⁾ の実を地面に落としてその汁を取

11) 自分の位階から追放される (ḥurriḡa 'an martabati-hi) : 写本B [f. 126a] とC [p. 31] では、「その結果、前述のことが生じる」(yatarattabu 'alay-hi mā ḡukira ānīf^m)。

12) 首 ('awāniq) : 'unuq (首) の複数形であろう。ただし、主要な辞書に見られる綴りはa'nāqである。

り出すために、その樹に登ることを常とする人々であり、その汁は酒にするか、あるいは煮詰めて糖にする。彼らの下は、大工、鉄工、金細工師、漁師などである。さらにその下にも多くの集団があり、その中には底辺の人々がいる。彼らは、耕耘や播種および両者に関連した仕事を常としている人々である。彼らもまた複数の種類に分かれている。[33 (181)]

マラバルの不信仰者たちの間で知られている1年のうちの幾夜かにおいて、底辺の人々の一人の〔投げた〕石が彼より上位の女性の一人に当たった場合、もし彼女に男性が同行していなければ、たとえ妊娠していても、彼女はその位階から落とされる¹⁴⁾。そうになると、支配者 (wālī) は彼女を捕らえて売ってしまう。あるいは、彼女が我々の所へやって来てムスリムになるか、キリスト教徒になるか、ヨーガ行者になるかである。同様に、上位の女性と下位の男性の間で¹⁵⁾、または逆に〔上位の男性と下位の女性の間で〕性交が行われた場合、上位の者はその位階から落とされる。そのような者には前述のいずれか一つしか結末は無いのであるが、紐の主がナーヤルの女性と性交する場合は例外で、前者はその位階から追放されない。紐の主たちの間ではこれを慣習としたのであるが、それは前述の理由による。すなわち、バラモンの間では長兄だけが結婚し、その他の者はナーヤルの女性たちと通じるからである。

無知で愚かなことに、彼らが自ら固執している以上のごとき宗教的義務が何と多くあることか。これはつまり、彼らがイスラームの宗教の優れた点に惹かれて入信する主な要因となるよう、神——称えられ高められんことを——が定めたことなのである。以上の叙述は、〔本来の〕叙述の間に余談として置かれたに過ぎない。叙述を〔本来の〕叙述へと導き¹⁶⁾、この書物 (hādīhi al-awraq) で我々が目指している所へと戻ることにする。

13) ヤシ (nārgīl) : 汁から酒と糖が作られるという説明を勘案すると、オウギヤシ (パルミラヤシ、砂糖ヤシ) か。

14) 上位の女性が下位の者との接触だけでなく投石によっても穢されるということについては、トメ・ピレス (1524年以降没) とバルボザも記している [バルボザ : 543–544頁; ピレス : 161頁]。

15) 上位の女性と下位の男性の間で (bayna ‘alīyat⁻ⁱⁿ wa danīy⁻ⁱⁿ) : *Tuḥfa/L* では bayna ‘alīyat⁻ⁱⁿ danīy⁻ⁱⁿ となっているが、写本 [A: f. 8 b; B: f. 126b; C: p. 32; D: f. 9 a] に従い、接続詞 wa を補って読む。

それは、以下のとおりである。前述のシャラフ・ブン・マーリク、マーリク・ブン・ディーナール、ハビーブ・ブン・マーリク、その他の者たちが[34(180)]マラバルに入り、前述の港市(banādir, sg. bandar)にマスジドを建て、そこにイスラームの宗教が広がると、その民は徐々に入信していった。そして、多くの地域(aṭrāf)から商人たちがそこへやって来て、前述以外の地(bilād)も栄えるようになった。たとえば、カリカット、ペリアンコード¹⁷⁾、ティルランガディ¹⁸⁾、そしてタスル¹⁹⁾、そしてポンナニ²⁰⁾、パラパナンガディ²¹⁾、そしてパラバンナ²²⁾といったチャリヤム²³⁾の近辺〔にある町〕。また、カップパト²⁴⁾、スィッコティ²⁵⁾および両者以外のファンダライナ²⁶⁾の近辺〔にある町〕。また、カナノール、エダツカド²⁷⁾、ティルバンガト²⁸⁾、マヘ²⁹⁾、チャンマンパー³⁰⁾といったダルマファッタン³¹⁾の近辺〔にある町〕。その南では、プドパッタナム³²⁾とナダプラム³³⁾であり、クランガノール³⁴⁾の南では、コーチン、ビー

16) *Tuḥfa*/L, *Tu.ḥfa*/S [p. 242] および写本 [A: f. 9a; B: f. 127a; C: p. 33; D: f. 9a] ではこの区切りに相当する部分に接続詞が無いが、*Tu.ḥfa*/Q [p. 21] に従い、接続詞waを補って読む。

17) Baḷinkūt (Veliancode/Veliyankode). Malappuram 県の港町。ポンナニの南東 5 km。Cf. Logan 1887: 77.

18) Tīrūrānkād (Tirurangadi). Malappuram 県にある町。カリカットの南東 30 km。なお、この地名の末尾の文字は特殊で、写本 A [f. 9a] ではアラビア文字のダール(d)の下に弁別点 3 個が、写本 B [f. 127a] と D [f. 9b] では弁別点 1 個が付されている。このように写本によって異同があるが、本訳では仮にこの文字を d と表記しておく。

19) Tānūr (Tanur). Malappuram 県の港町。ティルランガディの南西 5 km。Cf. Logan 1887: 77.

20) Fannān (Ponnani). Malappuram 県の港町。タスルの南 20 km。Cf. Logan 1887: 77.

21) Parpūrānkād (Parappanangadi). Malappuram 県の港町。タスルの北 5 km。Cf. Logan 1887: 76.

22) Parwanūr (Paravanna). Malappuram 県の港町。タスルの南 8 km。Cf. Logan 1887: 77.

23) Ṣāliyāt (Chaliyam). 「ジハード戦士の贈り物(3)」[36頁注19] 参照。

24) Kāpkāt (Kappatt/Kappatangadi/Kappad). カリカットの 10 km 余り北西にある町。その海岸は、バスコ・ダ・ガマの船隊が最初に錨をを降ろした地として知られる [Logan 1887: 73]。

25) Tirkūdī (Trikkodi/Thikkodi). Kozhikode 県の港町。カリカットの北西 30 km。Cf. Logan 1887: 72.

26) Fandarayna. 「ジハード戦士の贈り物(3)」[34頁注7] 参照。

27) Idakkād (Edakkad). Kannur 県の港町。カナノールの南東 13 km。

ピン³⁵⁾、パリプラム³⁶⁾である。これら以外にも同様に「栄えるようになった」港市がある。

これらの町では住民が増加した。そして、そこにムスリムたちが住むようになり、彼らの商売³⁷⁾が盛んになった。というのも、その支配者たちと彼らの軍団は不信仰者であるが、支配者たちによる悪政は少なく、彼らは前述の慣習を守り、めったにそれに背かないからである。そこでは、ムスリムは臣民であり、少数派であり、不信仰者たち³⁸⁾の十分の一にも満たない。

古い時代からマラバルでもっとも偉大で有名な港市はカリカットの港市である。しかし、フランクがマラバルへ到来し、マラバルの民の出航を妨げるようになった後、カリカットは衰退し荒廃してしまった³⁹⁾。マ

-
- 28) Tirwankād (Tiruvangad/Thiruvangad). カナノールの南東20kmのThalassery (Tellicherry) にあるヒンドゥー教寺院とその周辺の地名であろう。*Tuhfa/L*ではParrūnkādと綴られているが、明確に最初の文字をpとするのはD写本のみで、他の3写本ではtと読める。また、rに明確にシャッドが付けられている写本はない。
- 29) Mayyālī (Mahe/Mayyazhi). Kannurの南東約30kmにある港町。この地名をNainarはHaylīとしており [*Tuhfa_trans/N1*: 51]、*Tuhfa/L*も最初の文字をhとしているが、いずれの写本でも最初の文字はmである [A: f. 9 a; B: f. 127a; C: p. 33; D: f. 9 b]。 *Tuhfa_trans/N2*はMaheとしている [p. 45]。
- 30) Ćammanpā. *Tuhfa_trans/N2*はこの地名をChemmanadとしている [p. 45]。Kasaragod県内の海沿いにあるChemnadという村のことか。しかし、「ダルマファッタン」の近辺」として挙げられている他の地名から離れているので、別の地名である可能性もある。
- 31) Darmafattan (Darmadam/Dharmapatam). 「ジハード戦士の贈り物 (3)」[34頁注8] 参照。
- 32) Pudfattan (Pudupattanam/Putupattanam). マへの南東にあった港市 [Nainar 1942: 29; 大旅行記: 6巻125–126, 174–175頁 (注128)]。
- 33) Nāḍāwaram (Nadapuram). Kozhikode県の町。カリカットの北50km。
- 34) Kudunkallūr (Cranganur). 「ジハード戦士の贈り物 (3)」[33頁注3] 参照。
- 35) Bapp (Vypin/Vypeen). コーチンの海岸沿いの島。現在はコーチン市に属する。
- 36) Pallippuram. コーチンの南20km、水郷地帯の一集落。
- 37) 彼らの商売 (tiḡārat-hum): このように綴っているのはD写本 [f. 9 b] のみで、他の3写本ではtiḡārāt-humと読める [A: f. 9 b; B: f. 127b; C: p. 33]。後者の綴りは辞書には見られないが、tiḡāraの複数形であろう。
- 38) 不信仰者たち (ma'āṣīr-hum): ma'āṣīrは辞書にはほとんど見られない形である。ここでは「共同体」「集団」を意味するma'sarの複数形の異形であると推測し、「彼ら(不信仰者たち)の共同体」という意味に解して訳出した。もう一つの可能性として、この語をmi'sār(十分の一)の複数形と解釈すれば、当該句は「彼ら(不信仰者たち)の数十パーセント」という意味になろう。

ラバル地方全域のムスリムには[35 (179)] 実力を持ち、彼らを治めるアミールがいない。しかるに、不信仰者の支配者がムスリムたちを治め、彼らの諸事を握り、不信仰者たる支配者たちのあいだで罰金を科すと定められていることをムスリムの誰かが為した⁴⁰⁾ 場合に罰金を科す権限を握っている。

このような〔状態〕にもかかわらず、マラバルのムスリムは、不信仰者たちのあいだで敬意と榮譽を手に行っている。というのも、不信仰者たちの地の繁栄(imārāt)のほとんどは、ムスリムたちと共にあるからである。支配者たちは金曜礼拝とイードの実施を許し、カーディーやムアッズィンのために給与(wazā'if)を定め、ムスリムたちのあいだでシャリーアに基づく裁定を実行するために〔給与を〕定めている。金曜礼拝を怠ることは許されず、怠った者は、ほとんどの地で、懲らしめられ罰金を科されることになっている。

不信仰者たる支配者たちのあいだで死刑を科すと定められていることをムスリムが為した場合は、ムスリムの有力者たち(kubarā')の同意の下で支配者がその者を処刑する。その後、ムスリムたちがその遺体を引き取り、湯灌をして死装束を着せて、葬儀の礼拝を執り行い、ムスリムの墓地に埋葬する。死刑を科すと定められていることを不信仰者が為した場合は、支配者がその者を処刑し、磔にするか、処刑した場所に放置して、犬とジャッカルに喰わせる。

支配者たちは、ムスリムから商売に関するウシュル税だけを徴収し、それ以外には、彼らのあいだで罰金を科すと定められていることをムスリムが為した場合に罰金を科すだけである。また、耕作地(zirā'āt)と果樹園(basātīn)の所有者からは、たとえその土地が多くても、ハラージュ税を徴収しない。

ムスリムが大胆不敵なこと(gur'a)を為して〔ムスリムの家へ逃げ

39) 荒廃してしまった(ḥarabat) : *Tuḥfa/L*ではḥaraḡat(出た)となっているが、写本[A: f. 9 b; B: f. 127b; C: p. 34; D: f. 9 b]に従って読む。

40) 為した(ṣadara) : *Tuḥfa/L*ではṣaddara(送り出した、公にした)とII形として読むようdの文字に重子音記号が付されているが、A・B・Cの3写本には付されていない[A: f. 9 b; B: f. 127b; C: p. 34]。D写本には記号が付されているようにも見えるが、不鮮明である[D: f. 9 b]。本訳では、この後を原形ṣadara(現れた; 生じた)と考え、「罰金を科すと定められていることがムスリムの誰から生じた」と解した。以下、「為した」「為して」と訳出した4箇所についても同様である。

込んだ〕場合、たとえそれが不当な殺害であっても、支配者たちがムスリムの許可なく彼らの家の中へ立ち入ることはなく、その行為者を監視し (mulāzama) [36 (178)] 兵糧攻めなどによって彼らのところから追い出すことをムスリムたちに委ねるのである。

不信仰者たちの誰かがイスラームに入信しても、彼らがその改宗者に害を加えて干渉することはない。むしろ彼らは、たとえその者が彼らのあいだでは最底辺の人々に属していたとしても、他のムスリムに対してと同じように敬意を払うのである。古い時代には、そのような改宗者のために、彼が益を得るためのもの⁴¹⁾をムスリム商人たちが集めたものである。

[36 (178)]

第4章 フランクのマラバルへの到来と彼らの醜惡な行為の一部 ——この章は数節から成る——

第1節 フランクのマラバルへの到来の始まり、彼らとザモリンとの間における対立の発生、コーチン、カナノール、クイロンにおける彼らによる要塞の建設、ゴアの港市の獲得と支配

それは以下の通りである。フランクのマラバルへの到来の始まりは、ヒジュラ暦904年のことで⁴²⁾、その時彼らはインドへの季節風 (mawsim al-Hind) が途絶えた後に3隻のミスマーリーヤ船⁴³⁾でファンダライナへ到来した。そして、そこから陸路でカリカットの港市へ向かい、そこに数ヶ月間滞在して、マラバルの情報と状況について知見を得た。[37 (177)] 彼らは商売には従事せず、彼らの国ポルトガルへと帰っていった。彼らについて語られているところによると、彼らがマラバルへ到来した目的は、胡椒の商売を独占するために胡椒の〔産出〕国を探求すること

41) 彼が益を得るためのもの (mā yartafiqu bi-hi) : 新たに商売を始める資金のことか。

42) 「フランクのマラバルへの到来の始まり」とは、ポルトガル王国から派遣されたバスコ・ダ・ガマ率いる船隊がカリカット近郊に到着したことを指す。一行は1498年5月17日にヒーリー山を視認し、20日にカリカット沖に投錨した [*Tuhfa trans./L*: 34, n. 1]。この事件があった年を *Tuhfa* は904年と記すが、実際にはヒジュラ暦903年9月中旬に相当する。

43) mismārīyāt. sg. mismārīya. 釘 (mismār) で外板などが固定されている船 [Agius 2008: 268–269]。

である。というのも、彼らはマラバルから複数の仲買人を経て (bi-wasā'it) 胡椒をもたらす者から買い付ける者たちからのみ胡椒を買っていたからである。

2年後、彼らは6隻のミスマーリーヤ船でやって来て、商人としてカリカットに入り、商売にいそしんだ。彼らはザモリンの役人たち ('ummāl) に「ムスリムの商売と彼らがアラブの地 (barr al-'Arab) へと旅することを禁止するべきです。彼らから得ている利益については、その何倍ものものを私たちから得られます」と言った。そして彼らは、数々の取引において、ムスリムに対して敵対的な行動をとったのである。そこでザモリンはフランクたちの殺害を命じた。彼らのうち70人か60人ほどが殺害され、残りの者は逃亡して自分たちの船に乗り込み、陸の人々に対して砲撃した。陸の人々も応戦した。

その後、彼らはコーチンの港市へ行き、その民と友好関係を結び (ṣālaḥa)、そこに小さな要塞を建てた。これは、彼らがインドに建てた最初の要塞であり、彼らはそれを居住地として利用した。彼らは海岸沿いにあったマスジドを破壊して教会を建て、コーチンの民と取引をおこなった。

その後、彼らはカンナヌールの民と友好関係を結び、[38 (176)] そこに要塞を建て、その民と取引をおこなった。彼らは胡椒と生姜を積んでポルトガルへと発った。これこそが、彼らが遠距離⁴⁴⁾を越えてやって来た最大の目的である。

それから1年後、彼らは4隻のミスマーリーヤ船でやって来て、コーチンとカンナヌールに上陸し、胡椒と生姜を積んで彼らの国へと発った。さらに2年後⁴⁵⁾、彼らは20または21、22隻、あるいは18隻のミスマーリーヤ船でやって来て、胡椒と生姜およびその他の品物を積んで彼らの国へと発った。彼らの問題は重大になった。

そこでザモリンは、古来の慣習に反して、コーチンへ進撃してそこを破壊し、2人ないし3人の支配者たちを殺害し、カリカットへ戻った。

44) 距離 (al-masāfa) : *Tuḥfa*/Lではal-musāfir (旅人) となっているが、写本 [A: f. 11a ; B: f. 129a ; C: p. 37 ; D: f. 11a] に従って読む。

45) 2年後 (ba'da sanatayni) : *Tuḥfa*/Lではba'da sinīna (複数年後) となっているが、このように綴るのはA写本 [f. 11b] のみである。他の3写本 [B: f. 129a ; C: p. 37 ; D: f. 11a] に従って読む。

彼らが殺害された原因は、フランク〔と彼らの友好関係〕にある。〔その後〕彼らの兄弟の息子たちが、フランクの力を頼んで、一族のうちの最年長者を任じるという彼らの古い慣習に背き、他の一族を排してコーチンとその周辺の王国を独占するようになった。フランクはコーチンの支配者たちの間で榮譽と敬意を得ようになり、彼らは支配者たちを戦闘や物資において大いに支援し、資金を与え、自分たちの商売に対するウシュル税を彼らに配当した。このようにして、フランクの問題が重大になったのである。[39 (175)]

おおよそ20隻の船がやって来てから1年後、彼らは10隻のミスマリーヤ船でやって来た。そのうち7隻は新しい船であったが、3隻は1年前に到来した船と共に航行していたが途中で遅れてしまい、この7隻と共に到来したのであった。そして、7隻は品物を積んで彼らの国へと発ち、3隻はコーチンに残った。

ザモリンは約1万人のナーヤルと多数のムスリムの一団を率いて彼らに向けて進撃したが、フランクが大砲を撃って戦ったため、コーチンには入れなかった。しかし、ボンナニのムスリムたちは3隻のスンプーク船⁴⁶⁾を用意して彼らと戦い、一部の者は殉教した。別の日には、ボンナニとベリアンコードの民が4隻のスンプーク船を用意し、ファンダライナとカップパトの民が3隻のスンプーク船を用意して、彼らと激しく戦った。ムスリムには被害は無かった。そのうち、雨季が近づいてきたため戦いが容易ではなくなった。そこでザモリンは、率いてきた者たちと共に自分たちの国へ無事に帰ったのである。神に称えあれ。

毎年、このようにして数多くの船が人員と資金を積んでポルトガルから到来し、多くの船がマラバルから胡椒と生姜およびその他の品物を積んでポルトガルへと発つということが続いた。[40 (172)]

フランクがコーチンとカンナヌールにおいて地歩を固め力を得ると、両地の民と彼らに追従する者は、フランクと友好的に航海に従事した。彼らはフランクの許可証 (awrāq, sg. warāqa) を取得して、安全のために、たとえ小さい船でも各船舶に〔ポルトガルの許可を得ていることを示す〕標識を取り付けたのである。フランクは、各許可証について、船主たちが出航の際に彼らの支配者たちに支払うべき一定額の課金を定

46) sanābīq, sg. sunbūq. インド洋で古くから多目的に用いられてきた船の一種 [Agius 2008: 156–157, 310–316]。

めた。支配者たちがこの方法に合意するよう、それが彼らにとって利益であることをフランクは示したのである。そして、許可証を持たない船を見つけた場合、フランクはその船を拿捕し、船の中の物を奪い、乗っている者を捕らえた。

ザモリンと彼の臣民および彼らに従う者たちは、フランクと戦い続けたが、ザモリンは彼らとの戦いに多額の財貨を費やし、ついに彼とその臣民たちは疲弊してしまった。ザモリンは、ムスリムのスルターンたちに支援を求めて使節を送っていたが、彼らは助けようとはしなかった。ただし、グジャラート⁴⁷⁾のスルターンでスルターン・ファードイル・ムザッファル・シャー⁴⁸⁾の父であるスルターン・マフムード・シャー⁴⁹⁾と、アリー・アーディル・シャー⁵⁰⁾の先祖であるアーディル・シャー⁵¹⁾——神が彼らの墓廟を照らさんことを——は一般の船 (marākib, sg. markab) とグラブ船⁵²⁾の準備を命じた⁵³⁾。しかしながら、二人は〔準備した船隊を〕海に出すことについて合意しなかった⁵⁴⁾。

他方、すでにエジプトのスルターンであるカーンスーフ・ガウリー⁵⁵⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——は彼のアミールの一人であるアミール・フサイン⁵⁶⁾をいくつかの軍団と共に13隻のグラブ船で派遣していた。彼はグジャラートのディウ (Dīw) の港市へ到着し、そこから

47) 写本ではĠuzarātまたはこれに近い綴りとなっている [A: f. 12b ; B: f. 130a ; C: p. 39 ; D: f. 12a]。

48) al-Sultān al-Fāḍil Muẓaffar Ṣāh. グジャラート王国 (アフマド・シャーヒー朝) 君主ムザッファル 2 世 (Ḥaṣīl Ḥān b. Maḥmūd 在位917–932 [1511–1526] 年)。

49) al-Sultān Maḥmūd Ṣāh (1 世). グジャラート王国君主。在位862–917 [1458–1511] 年。

50) ‘Alī ‘Ādil Ṣāh (1 世). ビジャープル王国 (アーディル・シャーヒー朝) 君主。在位965–987 [1558–1579] 年。

51) [Yūsuf] Ādil Ṣāh. ビジャープル王国建国者。在位895–916 [1490–1510] 年。アリー・アーディル・シャー (1 世) の曾祖父。

52) ġirbān. sg. ġurāb. 軍用船の一種。櫂と帆の両方を用いる [Agius 2008: 348–351]。

53) 命じた (amarā) : *Tuḥfa/L* は amara と完了形 3 人称男性単数形とするが、主語はスルターン・マフムード・シャーとアーディル・シャーの二人なので双数形とすべきである。C 写本以外の 3 写本は双数形となっている [A: f. 12b ; B: f. 130a ; D: f. 12a]。

54) 二人は…合意しなかった (lam yuwaqqiā) : この部分は、lam yuwaqqiā と受動態として読み、「二人は〔準備した船隊を〕海に出すことに成功しなかった」と訳すこともできる。

チャウル⁵⁷⁾へ向けて出港した。ディウの総督 (nā'ib) であるマリク・アヤース⁵⁸⁾は、グラブ船隊を率いて彼と行動を共にした。そして、[41 (171)] フランクの船隊の一部と遭遇し、戦闘となった。フランク側の大きなグラブ船を捕らえ勝利し、グラブ船隊を率いてディウへ帰還し、雨季の数ヶ月間そこに留まった。

ザモリンの命令によって、彼の国や他の地から小型船ばかり約40隻のグラブ船がディウへ到来した。フランク——神が彼らと戦わんことを——はアミール・フサインがディウに留まっていることを聞きつけると、準備を整えて約20隻の船隊で出撃し、突然ディウに到来した。フランク到来の情報がディウに伝わると、アミール・フサインは準備を整えないまま自分のグラブ船隊を出撃させ、マラバル人たちとマリク・アヤースもそれぞれのグラブ船隊を出した。フランク——神が彼らを呪わんことを——は〔これらの船隊と〕遭遇すると、アミール・フサインのグラブ船隊だけを狙い、一部のグラブ船を捕らえた。他の船は散り散りになった。至高なる神の定めと服することを求めるその裁定によって、この呪われし者たちは、コーチンへ凱旋したのであった。しかし、アミール・フサイン自身と彼が率いていた者たちの一部は助かり、マリク・アヤースとマラバル人たちのグラブ船隊も無事であった⁵⁹⁾。

その後、このアミールはエジプトへ帰還したが、ガウリーは対抗心を燃やした。そこで、完璧に準備した大型グラブ船約22隻を派遣し、ア

55) Qānṣū[h] al-Ġawrī. マムルーク朝スルターン。在位 906 – 922 [1501 – 1516] 年。ポルトガルの紅海・インド洋進出に対処するため、艦隊を派遣してポルトガルの動きを牽制しようとしたが、十分な成果をあげられなかった [Petry 1994: 58 – 60]。 *Tuḥfa* の写本では、Qānṣū と綴られている [A: f. 13a ; B: f. 130a ; C: p. 39 ; D: f. 12a]。

56) al-Amir Ḥusayn [al-Muṣrif al-Kurḍī]. 紅海・インド洋方面での軍事作戦を委ねられた司令官。その後、ジッダ総督に就任 [“Kānṣawh al-Ghawrī,” EI 2]。

57) Ṣīyūl (Chaul) : ムンバイの南約60kmにある港市。

58) Malik Ayās (Ayāz). グジャラート王国のマフムード・シャー 1 世の奴隷。1510 年頃にディウの総督に任命され 1522 年頃に没するまでその地位にあった。ポルトガルとも巧みに交渉し、その攻撃をかわした [ピアスン 1984 : 107 – 117 頁]。 *Tuḥfa* /L は Mālik とするが、4 写本はいずれも Malik と綴っている [A: f. 13a ; B: f. 130b ; C: p. 39 ; D: f. 12a]。

59) 1508 年にマムルーク朝とグジャラート王国の艦隊は、ポルトガル艦隊をチャウル沖で破ったが、翌年、両国の艦隊にザモリンの船を加えた連合艦隊は、ポルトガル副王ドン・フランシスコ・デ・アルメイダ率いる艦隊による報復を受けて敗北した [ピアスン 1984 : 111 – 112 頁]。

ミール・サルマーン・ルーミー⁶⁰⁾を〔42 (166⁶¹⁾〕前述のアミールと共に〔指揮官に〕任命した。二人はグラブ船隊を率いて、保護されしジッダ⁶²⁾の港市に到着し、さらにカマラーン⁶³⁾の港市へ至った。ところがアミール・フサインは、イエメンの戦争に介入し、その地を略奪した⁶⁴⁾。アミール・サルマーンはアデン(‘Adan)の港市へ行き、その後、ジッダへ戻った。そして、彼とアミール・フサインのあいだに戦いが生じた。アミール・サルマーンはジッダを離れた。というのも、アミール・フサインがムスリムたちと戦い、彼らの地を略奪したからである。そのため、ヒジャーズのスルターン(Sultān al-Ḥiǧāz)であるシャリーフ・バラカート(al-Šarīf Barakāt)は、フサインを捕らえ海に沈めた⁶⁵⁾。

その後、ガウリーとスルターン・サリーム・シャー・ルーミー⁶⁶⁾——神が両者に慈悲をかけんことを——の間に戦争が勃発し、ガウリーの敗退と殺害、彼の王国のスルターン・サリーム・シャー——神が彼に慈悲をかけんことを——による奪取が生じたという情報がジッダに届いた⁶⁷⁾。神は事物の支配者なり。

60) Salmān al-Rūmī. 紅海・インド洋で活躍したオスマン朝海軍提督。ポルトガルに対抗するマムルーク朝に協力するため、1514年以前にオスマン朝からカーンスーフ・ガウリーの許へ派遣されていたが、マムルーク朝艦隊とともに遂行した遠征の最中にマムルーク朝が滅亡した。その後一時不遇な時期もあったが、923 [1527] 年にイエメンで暗殺されるまで、紅海方面で活躍した〔“Selmān Re’īs,” EI 2〕。

61) *Tuhfa/L* の42頁と46頁は、乱丁により入れ替わっている。ただし、頁番号は正しい数字が印字されている。42頁と46頁に該当するPDF版の頁番号が前後の頁と連続していないのは、そのためである。

62) Ġudda. アラビア半島紅海岸中部の港市。メッカの外港。

63) Kamarān. イエメン北部沖の紅海にある島。

64) イエメンに拠点を築こうとしたマムルーク朝は、その地を支配していたターヒル朝(858–923 [1454–1517] 年)を攻め滅ぼした〔“Tāhirids,” EI 2〕。

65) このシャリーフ・バラカートとは、13世紀以降メッカを支配したハサン系シャリーフ家の一員で、マムルーク朝支配末期からオスマン朝支配初期にかけて支配者の地位にあったBarakāt b. Muḥammad b. Barakāt al-Hasanīのことであろう。ザイン・アッディーンはこの人物をヒジャーズのスルターンと呼んでいるが、マムルーク朝が同家に認めていた地位はメッカのアミール(Amīr Makka)であった〔高貴なる用語(1): 47頁; “Makka,” EI 2〕。また、エジプトの歴史家イブン・イヤース(930 [1523/24] 年頃没)によると、フサインを殺害したのはサルマーンであったという〔*Ibn Iyās*, v. 5: 190, 203〕。

66) al-Saltān Salīm Šah al-Rūmī. オスマン朝のスルタン。セリム1世。在位918–926 [1512–1520] 年。

915年9月22日木曜日 [1510年1月3日]、フランクはカリカットに上陸して戦い、ナーホダー⁶⁸⁾ のミスカール⁶⁹⁾ が建てた会衆モスクを焼いた。また彼らは、カリカットを手に入れたと主張して、ザモリンの邸宅に侵入した。当時、ザモリンはいくつかの戦争のために遠くにいて不在だったのである。そこで警備に当たっていたナーヤルがフランクに襲いかかり、彼らと戦ってそこから追い出した。[43 (169)] ナーヤルは約500人のフランクを殺害したが、なかには溺死した者もいて、その方が多かった。助かった者は、至高なる神の許しのもと、失意のうちに自分たちの船に乗り込んだ。

また、この日の前か後に、フランクはポンナニに上陸し、岸に置いてあったおおよそ50隻の船を焼き、約70名のムスリム男性が殉教した。同様に、彼らはアデンに上陸し、その民と戦った。神はムスリムを支援し、フランクを見捨てた。フランクたちは、神の許しのもと撤退し、彼らの目論見は失敗に終わったのである。以上は、アミール・マルジャー⁷⁰⁾ ——神が彼に慈悲をかけんことを——の統治期のことである。

コーチンとカナノールで力を得た後、フランクはクイロンの支配者と友好関係を結び、そこに要塞を建てた。クイロンとコーチンには、両地以外の場所へもたらされるよりも多くの胡椒がもたらされるのである。

また、彼らはゴアの民と戦い、そこを武力で奪い領有した。そこは、アリー・アーディル・シャーの先祖であるアーディル・シャー——神が彼の墓廟を照らさんことを——の港市の一つであったのだが、フランクはインドにおける支配の拠点 (dār al-mulk) とし、防備を固めたのである。その後、アーディル・シャー——神が彼に慈悲をかけんことを

67) 922 [1516] 年マルジュ・ダービクの戦いでマムルーク朝軍はセリム 1 世率いるオスマン朝軍に敗れ、カーンスーフ・ガウリーも戦死した。翌 923 [1517] 年、セリム 1 世は最後のスルターンを破り、マムルーク朝を滅ぼした [NID: 80]。

68) nāḥūdā. 「船長」を意味するペルシア語由来の語。ここでは、船主あるいは船を所有する商人を意味していると思われる。なお、4 写本のうち B [f. 131a] と C [p. 41] は、nāḥūd と語末のアリフを欠いた綴りとなっている。

69) Miṭqāl. 1340 年代にカリカットを訪れたイブン・バットウータが、現地の資産家で交易用の船を多数所有するナーホダーとして言及している。彼が建てたモスクは、この事件で被害を受けたものの修復され、創建当初の建築物が現存している [大旅行記: 6 巻127頁、181頁 (注154); Shokoohy 2003: 154]。

70) al-Amīr Maṣṣān. ターヒル朝滅亡後の混乱期にアデンを支配した人物。Baḥraq という名で知られる学者でスーフィーでもある Ḡamāl al-Dīn Muḥammad b. 'Umar を支援した人物として知られる。927 [1521] 年没 [“Baḥraq,” EI 2]。

——がフランクと戦いゴアを征服して彼らを追い出し、そこをイスラームの家⁷¹⁾とした。しかし、フランク——神が彼らを呪わんことを——は対抗心を燃やし、重厚な装備で再来して戦い、ついにゴアを奪って支配したのであった⁷²⁾。[44 (168)] 一説には、その地のアミールと有力者たちがフランクと合意した結果、その奪取が容易になったとも言われている。その後、フランクは数多くの堅固な要塞を建て、彼らの力は次第に増大した。神は、何事かを望めばそれを達成するのである。フランクの力は、年月を追うごとに増大するようになった。

71) イスラームの家 (Dār Islām) : 4 写本とも Islām には冠詞が付されていない [A: f. 14b ; B: f. 131b ; C: p. 42 ; D: f. 13a]。

72) 1510 年、総督アルブケルケはゴアを征服し、ここをポルトガルの拠点とした [「ゴア」『南アジアを知る事典』]。

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』テキスト・翻訳
〈写本〉

Ms. 2799. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 714) [ms. A (A
写本)]

Ms. 2807. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 1044 – V) [ms.
B (B写本)]

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. (Morley
1854: no. IV) [ms. C (C写本)]

Ms. Add. 22375. British Library (British Museum旧蔵 Cureton 1846 – 71:
no. 945) [ms. D (D写本)]

〈刊本〉

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David
Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuhfa/L*]

Tuhfat al-muḡāhidīn fī ba‘d aḥbār al-Purtukāliyyīn. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid
Šams Allāh al-Qādirī. Ḥaydarābād: Maṭba‘ al-Tārīḥ, [1931]. [*Tuhfa/Q*]

Tuhfat al-muḡāhidīn fī aḥwāl al-Burtuḡāliyyīn. Ed. Muḥammad al-Sa‘īd al-
Tārīḥī. Bayrūt: Mu‘assasat al-Wafā’, 1985. [*Tuhfa/T*]

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリイ・マリイバーリー著『ポルト
ガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（１）」『京都女子大
学大学院文学研究科研究紀要史学編』第15号、2016年：87–97頁。[ジハー
ド戦士の贈り物（１）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリイ・マリイバーリー著『ポルト
ガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（２）」『京都女子大
学大学院文学研究科研究紀要史学編』第16号、2017年：33–54頁。[ジハー
ド戦士の贈り物（２）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリイ・マリイバーリー著『ポルト
ガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（３）」『京都女子大
学大学院文学研究科研究紀要史学編』第17号、2018年：33–42頁。[ジハー
ド戦士の贈り物（３）]

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David

Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuhfa_trans/L*]

Tuhfat-al-mujāhidīn: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942. [*Tuhfa_trans/N1*]

Tuhfat al-mujāhidīn: a Historical Epic of the Sixteenth Century. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. [Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah] Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006. [*Tuhfa_trans/N2*]

辞典・目録類

辛島昇他監修『南アジアを知る事典』新訂増補、平凡社、2002年。[南アジアを知る事典]

Bosworth, Clifford Edmund. *The New Islamic Dynasties*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1996. Paper back ed., 2004. [NID]

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscriptorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846 – 71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998. [Cureton 1846 – 71]

Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *The Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960 – 2009. [EI 2]

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India Office*. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. London, 1854. [Morley 1854]

史料・史料訳注

イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全8巻、平凡社〈東洋文庫〉、1996–2002年。[大旅行記]

谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（１）」『史窓』67号（2010年）：27–65頁。[高貴なる用語（１）]

- ドゥアルテ・バルボザ「マラバル地方について」生田滋 訳、トメ・ピレス『東方諸国記』（大航海時代叢書 第1期5）生田滋ほか 訳注、岩波書店、1966年：499－549頁。〔バルボザ〕
- トメ・ピレス『東方諸国記』（大航海時代叢書 第1期5）生田滋ほか 訳注、岩波書店、1966年。〔ピレス〕
- Ibn Iyās, Muḥammad b. Aḥmad al-Ġarkasī. *Badā'i' al-zuhūr fī waqā'i' al-duḥūr*. Ed. Muḥammad Muṣṭafā. 5 vols. Wiesbaden and Cairo, 1960－1975. Rpt. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣrīya al-Āmma li-l-Kitāb, 1982－1984. [Ibn Iyās]

研 究

- 栗屋利江「英領マラバルにおける母系制（マルマッカターヤム制）の変革の動き——1896年の「マラバル婚姻法」を中心として——」『東方学』第77輯、1989年：101－117頁。〔栗屋1989〕
- 栗屋利江「ケーララにおける母系制の解体と司法」小谷汪之 編著『西欧近代との出会い』（叢書カースト制度と被差別民 第2巻）明石書店、1994年：321－347頁。〔栗屋1994〕
- 谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人——ザイン・アッディーン・マアバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き——」森部豊・橋寺知子 編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、2012年：231－243頁。〔谷口2012〕
- ピアスン、マイクル・ネイラー『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者——』生田滋 訳、岩波書店〈岩波現代選書〉、1984年。〔ピアスン1984〕
- Agius, Dionisius A. *Classic Ships of Islam: From Mesopotamia to the Indian Ocean*. Leiden and Boston: Brill, 2008. [Agius 2008]
- Logan, William. *Malabar Manual*. 2vols. Madras: The Government Press, 1887. Rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989. 5th rpt, 2010. [Logan 1887]
- Nainar, S. Muhammad Husayn. *Southern India as Known to Arab Geographers*. New Delhi: Cosmo, 2004. Rpt. of *Arab Geographers' Knowledge of Southern India*. 1942. [Nainar 1942]
- Petry, Carl F. *Protectors or Praetorians? : The Last Mamlūk Sultans and*

Egypt's Waning as a Great Power. Albany: State University of New York Press, 1994. [Petry 1994]

Shokoohy, Mehrdad. *Muslim Architecture of South India: The Sultanate of Ma'bar and the Traditions of the Maritime Settlers on the Malabar and Coromandel Coasts (Tamil Nadu, Kerala and Goa)*. London and New York: RoutledgeCurzon. [Shokoohy 2003]